

福島県 中学校長会 広報

・会長挨拶「就任のあいさつ」.....	1
・第66回福島県中学校長会総会	2
・平成28年度 組織及び役員一覧	2
・学校教育の今日的課題 「『チームとしての学校』の実現に向けて」... 3	
・平成28年度中学校長会の活動と運営.....	4~5
・第67回全日本中学校長会総会報告	6
・支会情報と特色ある経営 (福島・石川・南会津・いわき)	7~10
・新会員紹介	11
・随想「伝えなければならないこと」.....	12



就任のあいさつ

福島県中学校長会長 福地 憲司
(福島市立福島第四中学校)

私こと、今年度の会長を拝命いたしました。微力ではございますが、皆様方のお力添えをいただきながら誠心誠意努めて参りますのでよろしくお願ひいたします。

まずはじめに、平成28年熊本地震により被災された方々に心よりお見舞いを申し上げますとともに、一日も早い復興をお祈りいたします。

次に、本年3月末をもってご勇退されました校長先生方のご功績に敬意を表しますとともに、長年にわたるご指導に対しまして感謝を申し上げます。さらには東日本大震災及び原発事故後の教育の復旧・復興に向けて、様々な視点からご助言をいただきました本会役員の皆様方にも、心より感謝と御礼を申し上げます。

さて、東日本大震災及び原発事故からまる5年が経過するも、未だ再開が叶わない臨時休業や避難先に移転しての再開などの学校は合わせて13校。教育の復興に向けた道のりはまだまだ遠く、依然厳しい状況であると言わざるを得ません。うち臨時休業中の学校においては、それぞれの避難先における生徒の心のケアなどの支援策を講じながら、再開に向けての最大の課題となっている生徒の確保等の条件整備に当たっているところです。

また、県内の各学校においても、様々な課題と向き合いながら、全教職員の英知を結集しながら効果的な教育課程の実施に努めていただいているところです。

そのような中において、今年度10月14日には、県単独としては9年ぶりとなる第44回福島県中学校長会研究協議会がいわき市で開催されます。本県中学校教育の一層の充実発展に大きく寄与するものであり、いわき支会様には、心からの感謝を申し上げます。

ところで現在、本県の学校教育が当面する課題としては、学校再開、心身の健康、放射線教育、

防災教育の推進、新たな教育改革制度への対応など多岐にわたっております。そのような中において、本校長会の運営については、様々な状況下にある各学校の実態を踏まえ、「教育活動の正常化と当面する諸課題の解決」という基本方針の基に、各専門部会を中心に充実した活動を展開しております。

今後、校長は、「学校は復興のシンボルであり、復興の活力源である」ことをさらに肝に銘じ、ふるさと福島の復興と進展に寄与すること、さらに、学校経営の最高責任者としてのリーダーシップを発揮し、教育課程の効果的な運用と教育環境の整備を図りながら、子供たちに「生き抜く力」を身につけさせること、これらに努める事が肝要であります。

運営に当たりまして、次の4つの観点を重視して取り組んで参ります。

- 1 校長会は、校長自らの見識・資質等を高める研修の場であることを踏まえ、その成果等の効果的な活用（教育行政への提言等）を推進します。
- 2 「全日中教育ビジョン」を踏まえ、学校からの教育改革に努めます。
- 3 教職員としての誇りと使命感を持ち不祥事の絶無に努めます。
- 4 教育諸条件の整備・充実と教職員の処遇改善に努めます。

以上の4点を柱に、今年度も各支会の活動と連携を図りながら各専門部会の積極的な取り組みを通して、諸課題の解決に向け邁進して参ります。

終わりに、子供たちが郷土への誇りと自信、将来への「夢」と「志」を持ち、本県の復興と発展を担う人材として成長するために、子供たちに「生き抜く力」そして「未来を切り拓く力」を育めるよう、会員の皆様のご理解とご協力を重ねてお願い申し上げます、就任のあいさつといたします。

平成28年度 第66回福島県中学校長会総会

平成28年度の第66回福島県中学校長会総会は、4月20日(水)福島県教育会館にて開催されました。

総会では、小野田敏之会長代行のあいさつにおいて、震災・原発事故から5年が経過し、子供たちは、多くの人々に支えられながら、困難を乗り越え、命の尊さなどを学び、今、ふるさと福島の再生と復興のため自分にできることは何か、との思いで学校生活を送っている。校長としてもいわき市において開催される県の研究協議大会や人事評価システムの本格実施などを通し、よりよい学校経営のために更なる指導力を自ら高める努力が必要であると述べられました。

その後、議事に入り、平成27年度会務・事業の承認及び決算報告が上程どおり承認され、続く平成28年度の役員選出では、満場一致で福地憲司氏(福島市立福島第四中学校)が会長に選ばれました。

その後平成28年度事業計画及び予算案が今年度の重点事項を中心に審議され、原案どおり承認されました。

総会の後に行われた、小・中合同開会式では、小・中校長会を代表して、小学校長会長福士寛樹氏があいさつし、続いて、来賓を代表して、県教育委員会教育長鈴木淳一氏、市町村教育委員会連絡協議会副会長藤田克彦氏、元県小学校長会長大和田紀男氏より祝辞をいただきました。最後に、前県中学校長会長菅野善昌氏が退会役員を代表してあいさつをされ、式を閉じました。



平成28年度 組織及び役員一覧

※ 理事が2名いる支会(福島・郡山・いわき)の支会長：◎印
※ 常任理事：○印

役職名	氏名	勤務校	
会長	福地 憲司	福島 四	
副会長	行財政	鈴木 一高	二本松 一
	研究	酒井 完	若松 一
	進路指導	小野田 敏之	大 熊
	生徒指導	面川 三雄	白河 二
監事		志村 隆弘	郡山 四
		宇内 伸一	新 鶴
		山野辺 藤夫	中村 一
理事	福 島	◎○佐藤 和彦	福 島 二
	福 島	福地 憲司	福 島 四
	伊 達	佐藤 敏意	桃 陵
	安 達	鈴木 一高	二本松 一
	郡 山	◎○吉井 明生	安 積
	郡 山	飯村 新市	郡山 二
	岩 瀬	森合 義衛	須賀川 一
	石 川	小玉 陽彦	石 川
	田 村	宗像 静夫	船 引
	東西しらかわ	面川 三雄	白河 二
	北 会 津	酒井 完	若松 一
	耶 麻	長谷川 良三	喜多方 一
	両 沼	野内 昭	高 田
	南 会 津	○馬場 永好	南会津
	相 馬	遠藤 隆徳	原町 一
	双 葉	小野田 敏之	大 熊
い わ き	◎○松本 伸一	平 三	
い わ き	小柳 達弥	植 田	

【事務局】

事務局	事務局 長	伊藤 隆幸	福 島 一
	行財政部 会長	茅原 秀雄	清 水
	研究部 会長	小針 伸一	北 信
	進路指導部 会長	西牧 伸弘	岳 陽
	生徒指導部 会長	齋藤 良一	野 田
	広報部 会長	佐藤 浩子	西 根
	庶 務	大越 一也	附 属
	会 計	黒須 智則	平 野

学校教育の今日的課題



—「チームとしての学校」 の実現に向けて—

福島県中学校長会副会長 鈴木 一高
(二本松市立二本松第一中学校)

これからの学校の在り方として、「チームとしての学校」が求められています。昨年11月、中央教育審議会から「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について」答申(案)が示されました。これを踏まえれば、これまでの連携という言葉の繰り返しでは済まされない「チーム学校」としての変革が求められているのです。

「チームとしての学校」が求められる背景

よく学校は、一般社会から見て閉鎖的と言われますが、子どもたちの全ての活動は、教育のためであるということを念頭に、学校が、多様な人々とのつながりを保ちながら学ぶことができる開かれた環境となることが不可欠となってきます。これからの教育課程には、教育が普遍的に目指す根幹を堅持しつつ、社会の変化を柔軟に受け止めていく、「社会に開かれた教育課程」が求められると思うのです。

また、その一方で、社会の急激な変化に伴い、子どもや家庭、地域社会も変容し、生徒指導や特別支援教育等に関わる課題が複雑化・多様化しており、学校や教員だけが課題を抱えて対応するのでは、十分に解決することができない課題も増えている現状があるのも実情です。

「チームとしての学校」の必要性

学校が、複雑化・多様化した課題を解決し、子どもに必要な資質・能力を育てていくためには、学校のマネジメントを強化し、組織として教育活動に取り組む体制を創り上げるとともに、指導体制を整備することが必要となります。

その上で、生徒指導や特別支援等を充実していくために、学校や教員が心理や福祉等の専門スタッフ等と連携・分担する体制を整備し、学校の機能を強化していくことが重要となるわけです。

「チームとしての学校」の在り方

校長として、「チームとしての学校」を創り上げるために3つの視点を上げてみました。

(1) 専門性に基づく体制の構築

学校や子どもたちの実態を捉え、学習指導等に取り組むため、指導体制の充実を図り、

さらに、心理や福祉等の専門スタッフについて、職務を明確化し、配置の充実に努める。

(2) 学校のマネジメント機能の強化

専門性に基づく「チームとしての学校」が機能するためには、学校のマネジメント機能をこれまで以上に強化することが大切であり、それには、優秀な管理職の確保はもとより、主幹教員配置の促進や事務機能の強化等、校長のマネジメント体制を支える仕組みの充実が求められる。

(3) 教職員が力を発揮できる環境の整備

教職員がそれぞれの力を発揮し、伸ばしていくためには、人材育成の充実や業務改善の取り組みが大切である。

「チームとしての学校」を実現するために

これらを実現させていくためには、学校ばかりでなく、当然、国や教育委員会の必要な教員定数等の拡充を図ってもらわなければなりません。

この改革案の柱は専門性に基づくチーム体制を構築することによる組織力強化にあります。今、教員には能動的学習(アクティブラーニング)を重視する授業改善が求められております。専門性を生かした学習指導のためにも、教員の負担軽減につながる環境づくりが急務なわけです。

そのために、「子どもに育む資質・能力」「授業」「教育課程」「組織」の在り方に関連づけ一体的にとらえるカリキュラム・マネジメントの発想を持つことが大切であると思われます。

学校は地域の中核的施設です。地域と学校がパートナーとして相互連携することは本来あるべき姿です。まず、学校全体が意識改革を行い、立場の異なる人材をチームとして迎え入れ、同じ目標に向かって連携を深められるかにかかっています。

そこには、やはり校長のマネジメント力強化が必要不可欠であり、これまで以上に管理職のリーダーシップの向上が求められることとなります。

平成28年度 「県中学校長会の活動と運営」

事務局長 伊藤 隆幸

現在、本県の教育を取り巻く環境は、人口（児童生徒数）減少や少子高齢化及び過疎化の進行、高度情報化や国際化の急速な進展など急激に変化しています。さらに、本県は、東日本大震災・原子力発電所事故により、震災後5年となる現在でも休校2校、移転先で授業を行っている学校が10校という現状であります。平成28年4月1日現在で県外・県内に避難している子どもは（18歳未満）は21,428人で、前年10月と比較して1,232人が減少しているとはいえ、生徒の心身の健康の問題への対応や心のケアの充実、置かれている状況の中での進路選択など今後も取り組まなければならない課題が山積されている状況であります。

私たち校長は、これらの社会情勢や災害後の状況を的確に踏まえながら、ふるさと福島復興の担い手である生徒たちに対し、人間尊重を基盤としながら、困難に直面してもたくましく臨機応変に行動できるいわゆる「生き抜く力」の育成を目指して、学校経営の充実に努めなければなりません。また、「学校は復興のシンボルであり、復興の活力源である」ことを再認識し、学校経営の最高責任者としてのリーダーシップを発揮して学校経営に努めていく必要があります。

昨年度は、本年度本格実施となった「教職員人事評価」を見据えて、特別委員会を設置し、「新たな人事評価」のねらい達成のために」を冊子としてまとめ、全会員に配付したところであります。このことは、校長として人事評価制度の趣旨を的確に理解し、その目的である「教職員の資質の向上」「学校組織の活性化」「信頼される学校づくり」を果たすための取組みでありました。

また、平成28年3月には全日本中学校長会から「全日中教育ビジョン 学校からの教育改革」改

訂版が発刊されました。その中の第3章では全日本中学校長から10の提言がなされ、全日中が今後3年以内をめどに取り組むべき具体的な目標として示されています。本県校長会としましても、この提言を受け、本県中学校教育の更なる充実・発展を目指し活動を推進していく必要があります。

今年度は、中学校長会単独での第44回福島県中学校校長会研究協議会いわき大会が10月14日に開催されます。会員の英知と創意を結集して研究協議を行い校長としての学校経営力の向上を目指すとともに会員相互の連携の機会となることを期待しています。

さらに、今年度は平成29年度の「福島県中学校70年史」の出版に向けて編集作業を進める予定であります。震災後5年を含めた本県教育界激動のこの10年間の歴史を刻んだ冊子にしたいと考えております。

さて、本年度も各種調査等を通して本県教育の充実・振興に向けた課題を明確にし、教育行政をはじめ各種団体、関係機関等への働きかけなどを通してより強固な連携を図っていきます。

さらに、全日本中学校長会の研究主題「社会を生き抜く力を身に付け、未来を切り拓く日本人を育てる中学校教育」を受け、8つの小主題を各支会ごとに分担し、実践研究の成果を研究集録としてまとめ、校長としての資質の向上と学校経営の改善に生かしていきます。

今後とも、各支会との連携の強化を図るとともに、県小学校長会や高等学校長協会、その他関係諸機関との連携に努めながら諸課題の解決を目指していきたくと考えております。

会員の皆様の深いご理解とご協力、そして積極的な取り組みをよろしくお願いいたします。

専門部会活動の概要

● 行財政部会 ●

県小中学校長会の活動方針を踏まえ、互いに連携を密にしながら、教育行財政上の課題解決のために、組織的・継続的な対策活動に取り組む。特別調査については、震災後5年を経過したものの、未だ復旧・復興に向けて多くの困難を抱えている。深刻な状況を的確に把握し対応するため、継続実施する。

1 活動の重点

多様な教育活動に対応するための教育諸条件の整備・充実

教職員の待遇改善と福利厚生向上

当面する重要課題の調査研究と課題解決

2 調査研究活動

(1) 平成28年度「教職員人事の反省」

(2) 調査 : 教職員配置等に関する調査

(3) 調査 : 教育施策の実施状況調査

(4) 特別調査: 大震災・原発事故の影響に係る調査
以上の調査結果を分析し、課題を明確にして要望内容の資料とする。調査結果については、ホームページに掲載するので活用いただきたい。

3 要望活動

小中校長会の福士会長、福地会長を中心とする要望団を結成し、9月に要望活動を行う。要望先は、福島県人事委員会、県議会議員政党等を予定している。

要望活動を充実させるためにも、不祥事根絶・学力向上をお願いしたい。

4 教育懇談等

福島県教育庁関係者との懇談（8月）等を行い、連携して行財政上の課題解決にあたる。

(行財政部会長 茅原 秀雄)

● 研究部会 ●

1 共通理解に基づく共同研究の推進

今年度は3年継続研究の2年次であり、昨年度の研究を踏まえ、各支会ごとに共同研究を推進していくこととなります。また、今年度は、県研究協議会いわき大会が10月14日(金)、いわき市を会場に開催されます。県研究協議会は隔年で実施されていますが、平成19年度に二本松大会が開催されて以来、全日中福島大会(H21年郡山)、震災に伴う中止(H23年)や特別研究協議大会(H24年会津)、東北地区中福島大会(H26年福島)を経て、研究主題に基づく研究発表及び研究協議が県単独で開催されるのは実に9年ぶりとなります。いわき支会を中心とした実行委員会の皆様に感謝しながら、有意義なものとなるよう全会員で創造していきましょう。

2 研究推進資料の提供と研究集録の編集

県研究協議会いわき大会の分科会協議において研究を深めながら、年度末には8つの小主題における各担当支会の1年間の研究の取組を研究集録にまとめ、研究の成果を会員相互で共有するとともに今後の研究推進につなげます。

3 全日中、東北地区中と連携した研究の深化

今年度の全日中研究協議会は東北ブロックが開催担当になっており、東北地区中研究協議会を兼ねて、10月19日(水)~21日(金)、宮城県仙台市で開催されます。本県には会員数の50%の参加要請があり、多くの会員が全日中宮城大会に参加し、大会運営に協力するとともに、他県の研究推進にかかる情報等の収集にあたります。

4 原発事故に関わり、学校教育が向き合った課題、対応等の記録の累積と発信

今年度も、研究集録の中に、「ふくしまの今」を設け、特に“双葉支会”を中心に福島県の現状について掲載し、記録を累積することにより、学校課題を全会員で共有します。

(研究部会長 小針 伸一)

● 進路指導部会 ●

1 「生きる力」をはぐくむ進路指導の推進

- (1) 進路指導體制の改善・充実
 - ・キャリア教育の充実をめざす進路指導
 - ・啓発的体験学習を取り入れた進路指導など
- (2) 適正な進路指導推進のための資料収集、整備活用の工夫
 - ・情報の収集、整備、活用と進路相談の充実
 - ・各支会の進路指導主事会の活動と充実など

2 高等学校入学者選抜方法の改善に向けた高等学校との連携や関係機関との連携活動

- (1) 高等学校との連携強化
 - ・高等学校長協会、私立高校協議会との話し合い活動の推進(特に、調査書記載統一にかかる内容の加除修正)
- (2) 高等学校入学者選抜方法の改善、要望活動の推進
 - ・県立高校入学者選抜事務調整会議への要望や意見等の資料作成

- ・入学者選抜方法、内容、震災後の状況を踏まえた課題の把握と改善のための資料収集及び資料提供の推進

3 適正な進路指導充実のための諸調査の実施と資料提供

- (1) 進路指導に関する諸問題の把握と資料提供
 - ・平成27年度末進路指導に関する調査の分析と連携のための資料提供
 - ・平成28年度末進路指導に関する調査
 - ・県下一円の進路動向調査の実施と有効活用
- (2) 学級活動の時間の充実のための副読本編集
 - ・「中学生活と進路(県版)」の編集と活用
- (3) 適正な就職指導、専修学校・各種学校等の選択指導のための指導助言活動の推進
 - ・就職情報の収集と関係機関との連携強化
(進路指導部会長 西牧 伸弘)

● 生徒指導部会 ●

東日本大震災及び原発事故にかかわる中・長期的な課題を把握し、的確な対応を行う。また、生徒の心の問題に配慮し、安全で安心した学校生活を送れる学校づくりに努める。特に、ネット端末に関する今日的課題への適切な対応に努める。

- 1 高い規範意識と望ましい人間関係を基盤とした学習集団づくりに努める。
 - 毅然とした指導方針による規律維持、生徒指導の機能を生かした教育活動の充実
- 2 震災、原発事故等にかかわる課題、当面する諸課題の把握、解決や未然防止に組織を挙げて対応する。
 - 不登校、反社会的問題行動やいじめ等の実態把握と適切な対応、小学校やPTA等と連携したネット端末利用改善への提言と実践
- 3 小学校及び高等学校・家庭・地域・関係機関・団体との連携を強化する。
 - 特に小学校と連携した調査、部会長会の企画
- 4 生徒手帳を編集、刊行する。
 - アンケートに基づいた生徒手帳の編集、刊行
(生徒指導部会長 齋藤 良一)

● 広報部会 ●

広報部会は、広報誌「福島県中学校長会広報」を年2回発行し、平成24年度より開設したホームページの維持・管理を行い、本会及び関係団体等の活動状況や会員に役立つ新しい情報などを提供し、活用促進を呼びかけ、広報活動の充実に努めます。

- 1 本会及び関係団体等の活動や動向についての情報を提供し、広報活動の充実に努めます。
 - (1) 本会の組織・運営、事業内容、活動状況の報告
 - (2) 各支会の活動及び、本会活動への会員の意見や感想の紹介
 - (3) 関係団体等の活動概要の報告
 - (4) 広報紙の発行とホームページの運営、資料の整理
- 2 関係機関・団体等との連携を深め、情報を提供します。
 - (1) 関係機関からの情報把握と会員への早期周知
 - (2) 諸活動の報告など
(広報部会長 佐藤 浩子)

第67回 全日本中学校長会総会報告

5月26日・27日に、第67回全日本中学校長会総会が東京都の国立オリンピック記念青少年総合センターで開催され、総会と文部科学省行政説明、講演が行われました。本県校長会からは、福地憲司会長以下13名で出席してきました。

第一日目の午前中に開催された総会では、はじめに伊藤俊典会長の挨拶、退会役員への表彰楯贈呈、そして文部科学大臣等からの祝辞がありました。会長あいさつではまず、熊本・大分県地震へのお見舞と支援、次に「国の動きに対する対応」「全日中教育ビジョンの推進」「東日本大震災被災地における正常化への支援」について話されました。表彰楯贈呈の本県対象者は、菅野善昌前会長が表彰を受けました。

続いて議事に入り、平成27年度の会務報告・決算について承認され、今年度の役員についての審議では、会長として榎本智司氏（新宿区立新宿中学校）が承認されました。就任の挨拶では、第40代会長として未来ある中学生のために誠心誠意会長としての任務を果たすために校長会の目的を達成すべく、有言実行の全日中校長会として会員とともに歩んで行く上で、特に次の点について抱負を述べられました。

学習指導要領改訂への対応など、教育改革の推進

組織と機能を充実し、活性化を図ることについて

「全日中教育ビジョン」の具体的目標の提言と推進について

教育諸条件の整備充実や職責に見合った待遇改善を目指す取り組みについて

国の教育改革の動向への対応について

その後、平成28年度活動方針・予算が承認され、中学校教育70周年記念大会となる平成29年度第68回全日中研究協議会東京大会における研究協議会

主題及び分科会研究題についての提案と、宣言と決議を採択して議事を終えました。

最後に、第67回全日中研究協議会宮城大会について、星 豪氏（大崎市立古川中学校）より紹介があり、総会を閉じました。

2日目には、「当面する初等中等教育上の諸課題」の演題のもと、文部科学省大臣官房審議官浅田和仲氏による講演がありました。東日本大震災後の福島県への修学旅行が激減したことに触れ、風評に惑わされず、正確な情報のもとでの対応の必要性を話され、中央の現在の動きと今後について次のような内容の他、多くのことに言及されました。

教育再生実行会議について

教育課程の改善の方向性について

「次世代の学校・地域」創生プラン

全国学力学習調査について

小中一貫教育の制度化について

学習指導要領改訂について

引き続き行われた、文部科学省行政説明では、全514頁の資料をもとに初等中等局財務課長、教育課程課長、児童生徒課長、国際教育課長の4氏から、国の教育の動向について説明がありました。



支会情報と特色ある経営

福島

福島支会の活動



福島支会長 佐藤 和彦
(福島市立福島第二中学校)

～福島を創る つなぐ力
つなぐ力～を合言葉に、
本年度、福島支会が始動し
ました。

今年、本支会を会場とする各種大会が目白押しです。

中体連の県大会、東北大会では、陸上競技をはじめとして4種競技の舞台となり熱戦が期待されています。また11月には、全国学校体育研究大会福島大会が開催され、福島一中、福島四中、附属中で授業が公開されます。

さらに、今年度は、中教研においても県大会が県北大会となり、本支会でも社会や理科など5部会が会場校となっております。校長会としてもそれらの成功に向け、全面的に支援してまいります。

今日的な教育界の動向の一つに、教職大学院の設置があります。

現在、福島大学では、平成29年4月の開設に向けて準備を進めているところです。そこでは、これまでの教育実習とはちがった現場実習が組み立てられており、大学院と学校現場とのより一層の連携が求められております。受け入れ先の本支会としましても、「ふくしまの教育を支えるミドルリーダーの育成」のもと、その連携の在り方について検討を重ねていく必要があります。

他に、今後、校長会の世代交代が加速することから、組織力の強化と人材育成も急務となります。

本支会では、小学校長会とも連携しながら、年9回の学校経営研修会を開催し、管理職の資質の向上と人材発掘に努めているところです。

さらに、人事評価システムも本格実施となり、教職員一人ひとりのよさや特性を引き出し、高める校長の指導力が問われることとなります。この校長会が、互いに切磋琢磨し、校長力を高める場となるよう努めていかなければなりません。

《学校紹介》

地方創生イノベーションスクール2030

福島市立岳陽中学校

東日本大震災後、復興を自分たちの手でという願いを形にしようと2012年に復興教育プロジェクト「OECD東北スクール」が福島、宮城、岩手の中高生約100名により取り組まれ、大きな成果をもたらした。2015年からは後継プロジェクトとして「地方創生イノベーションスクール2030」がスタートした。このプロジェクトは、地域社会の創生をテーマとして中・高生が地域の行政や企業、大学と連携を図りながら、課題を解決するために様々な活動を展開するもので、いわばアクティブラーニングの最たるものといってよい。



このプロジェクトに本校では、「イノベーション部」という特設部を立ち上げ、部活動として参加した。部員たちは放課後や昼休みにPC教室に集まり、福島市の現状を分析し、本市の持つ魅力を再発見し新たな活力となる企画はないかと検討した。その結果、市内の温泉に泊まり、果樹園や共選場を回るといった農業と旅行を組み合わせた観光プランを作成し、内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局が主催する「地方創生 政策アイデアコンテスト2015」に応募した。立案に際しては、温泉の観光協会や農家で聞き取り調査を行うなど、実際に足を運び、現状把握に努めた。このプランは、高校生以下の部門で最高賞の地方創生担当大臣賞を受賞することができた。生徒の思いが評価を受けたものである。

今年度は、このアイデアを実現するため、福島第二中学校と共同で取り組み、旅行会社とも連携し、この夏休みにはこの企画が実現するまでになった。生徒たちの思いが、実際に社会を巻き込み、形となるという新たな教育の可能性を示すものとして今後も取り組んでいきたい。(校長 西牧 伸弘)

石川

石川支会の活動



石川支会長 小玉 陽彦
(石川町立石川中学校)

石川支会は、石川町、玉川村、平田村、浅川町、古殿町の5町村の中学校6校の会員で組織されています。

今年度は、平田村の2つの中学校が統合され平田村立ひらた清風中学校が誕生し、新たなスタートを切りました。県内でも会員数では最も小さな組織となりましたが、少ないながらも会員相互の連携を強固にし、県内一のまとまりのある支会になるよう会員相互の意思疎通を図ることを確認し、平成28年度をスタートしました。

今年度は、昨年より1校減となり、校長会の組織や中教研、中体連の組織が課題となりましたが、その課題も6人の会員の協議と理解により何とか解決することができました。

今後も課題はありますが、その解決に向け、6人の会員で協議し、良案を出しながら中学校長会の活性化を図っていきたいと考えています。

次に、本支会の特色ある活動を紹介致します。

1 「校長会、教頭会合同研修会」

毎年夏休みに各学校の校長、教頭先生方が一堂に会し、研修会を行います。今年度は、8月19日(金)に石川町教育委員会教育長さんから「教育行政上の諸問題」と題し、ご講話を頂くことになっています。年に一度ではありますが、校長・教頭が一堂に会し、研修を行うことは管理職としての共通理解を図り、協働態勢で学校経営を行うという意味で意義があります。

2 「中学2年生対象の教育講演会」

この講演会は、各学校6校の中学2年生を対象に毎年11月に実施しております。この活動は、石川青年会議所の援助を頂き、講師を招聘し、講演会を行っています。今年は、11月29日(火)に予定しております。講師はまだ未定ですが、道徳教育に関する講演を予定しております。昨年はゴルゴ松本さんが講師となり、「命の授業」という演題で講演を頂きました。

《学校紹介》

さあ始めよう ひらた清風中学校

平田村立ひらた清風中学校

平成28年4月、蓬田中と小平中が統合し、新設校「ひらた清風中学校」が開校しました。

6日、入学式に先立って行われた開校式には、校歌作曲者の池辺晋一郎氏にご出席いただき、校歌に込められた思いをお話しいただくとともに、初めて披露する校歌合唱の指揮も行っていただき、感動的なスタートを切ることができました。



本校の教育目標は、基本目標に「未来に向かって力強く前進する生徒」を掲げています。今、グローバル化

が進む中、国際社会に積極的に参加し、その発展に貢献できる人材の育成が求められています。村では「世界に羽ばたき、故郷に貢献する人材」の育成を願っています。本校の生徒は素直でまじめではあるものの、主体性や積極性が弱く、将来、社会人や職業人として生活するための資質の育成が重要な課題となっています。そこで、本校の学校経営の中心となる教育理念を「将来、社会の一員として自立した人間に成長するための基盤づくりができる学校」と定め、この教育目標を設定しました。

本校校歌の最初のフレーズは、「さあ始めよう わたしたち この広い空の下で 新しい自分たちを見つけよう」...このフレーズ通り、新たな自分づくり、そして、新たな学校づくりが始まりました。村のご厚意により2・3年生に制服や運動着を支給していただき、全校生が新しい制服、新しい運動着に身を包んでのスタートとなりました。地域の方々の温かいご支援に対する感謝を忘れず、「地域に愛され、信頼される学校」「元気なあいさつ・歌声が響き合う活気のある学校」「互いのよさを認め合い、培った力を発揮できる学校」をめざし、教職員の力を結集し、新たな学校づくりに取り組んでいきたいと思ひます。

(校長 有賀 真道)

南会津

南会津支会の活動



南会津支会長 馬場 永好
(南会津町立南会津中学校)

南会津支会は下郷町、南会津町、檜枝岐村、只見町の4つの町村からなり、学校数は8校で生徒数は合計664名である。生徒数は年間で約30名の減少傾向で、また来年度は檜沢中学校が閉校予定で今後もその傾向は継続する見通しである。今年も新任校長が2名赴任し、いずれも他管内からの昇任である。南会津町以外の町村では中学校が1校しかなく、それだけに年6回開催される郡校長会での情報交換や地区研修会は課題の共有と解決策の検討のため欠かせない。

1 小中高の連携

この地域は地理的・経済的条件から約7割の生徒が地元にある3校(田島、南会津、只見)の高校へ進学する。いずれも定員に満たないため高校進学を目的とした学習意欲は高くない。したがってより高い学力を身に付けるため小・中・高間の連携は重要であり、各地域で工夫しながら推進している。特に只見町では「只見町レインボープラン」を実施しており、確かな学力の定着を目指している。学校間の教師の交流や情報交換、校種間のTT指導などによる日々の授業改善や研修により教師の「指導力の向上」を図ると共に町内児童生徒の「生きる力」の育成に向けた取り組みを実践している。

2 特別支援教育に対する対策

南会津は特別支援学校が設置されていない県内唯一の地域である。そのため支援学級を卒業後、進学を希望する生徒は他管内に行かざるを得ない。通学できる距離ではないので施設に入居することとなるが震災以降、南会津の生徒は入居が困難な状況である。この事態を打開すべく南会津郡校長会は郡PTA連合会と共に分室も含めた対応策を県教委や行政機関に対し、あらゆる機会を捉えて訴え続けている。

《学校紹介》

郷土のよさを見つめて

南会津町立南会津中学校

学級活動の時間に「郷土のよさを見つめて」と題して、班ごとに南会津の自然や地域の取り組み等について具体例を挙げながら話し合った。ちょうど県の観光交流局が行っている「子どもふるさと福島魅力発掘プロジェクト」の案内が来ていたので、みんなで出し合った意見を発信しようという結論になり学級団体に応募した。しばらくして県内15校の選考に残り、12月に郡山文化センターでプレゼンを行うことになる。「子どもふるさと福島魅力発掘プロジェクト」とは、地域の魅力は素晴らしさを再発見し、紹介するという取り組みである。総合の時間を活用し、夏休みから秋にかけての地域散策や地域施設の訪問等を企画した。生徒の目線でどうすれば南会津の魅力を発信できるかを話し合わせ、最終的に「体験活動」を重視した3日間の旅行プランを考え出した。野菜の収穫体験、伊南川でのラフティング、森林浴やツリーイングなど南会津の自然を満喫するプランを実際に体験し、それらをパンフレットにまとめた。また、地元の酒造会社を訪問して、水や米にこだわった酒造りや「18才の酒造りプロジェクト」の話を聞く等、地域の誇れるものを再確認できたことは大変貴重な経験となった。自分達が発信するために「知りたい」「学びたい」「考えをまとめたい」「工夫したい」と積極的に取り組む姿勢が見られたことは、よい機会だったと思う。

生徒の感想から

郡山市でのプレゼンは大変緊張しましたが、みんなで今まで精一杯準備してきたので、とても楽しかったです。「優秀校」に選ばれたことも嬉しかったけれど、今までみんなで活動してきた時間が最高の思い出です。



(校長 馬場 永好)

いわき

いわき支会情報



いわき支会長 松本 伸一
(いわき市立平第三中学校)

いわき支会は、27年度から三和地区の4校が1校に統合となり、39校38名の会員（1校は小中兼務校の校長

で小学校籍）によって組織されています。本年度は、7名は他管内出身の校長先生方であり、1名は中高交流の先生で、全県的な視野に立って新鮮な感覚で学校運営に当たるとともに、積極的に校長会の運営に参画しております。

いわき市中学校長会の活動としては、例年通りの事業計画のもとで活動しました。その中で主なものを紹介します。

いわき支会は、中核市であるいわき市1市だけで構成されています。そのため研修権が市にある利点を生かして、校長研修・教頭研修の機会を活用して自らの専門性を高めたり、人材の育成に努めたりするなど、組織的・機動的に活動しています。

特に広域化・潜在化が著しく、そして我々の予想を超えて広がる生徒指導の問題など、校長会として共通理解・共通実践が必要な事案に対しては、情報交換の場を設置しています。校長ひとりでは悩むことなく情報を共有化し、リーダーシップを発揮しながら組織的に対応するため、特に校長自らが生徒の交友関係を把握し、危機感をもって情報を交換し合うとともに、警察や児童相談所、家庭教育相談員等関係機関との連携の実際について話し合い、早期発見・早期対応を期しています。

今年度は、校長会のあり方について、時代の要請に即した活動ができるように組織の見直し及び活動のあり方についての検討をしていく予定であります。大量退職、大量昇任、大量採用時代に向けて今から、様々なことへ対応できるようにしていかなくてはならないと考えます。

《学校紹介》

「地域とともにある学校」をめざして

いわき市立田人小・中学校

本校は、平成26年度の地区内の学校再編、平成27年度の一つの校舎を共用する小中一貫教育推進校への移行を経て、今年度、いわき市として初めてのコミュニティ・スクール（学校運営協議会設置校）として、新しい歴史を刻みました。「小中一貫教育」と「田人ならではのコミュニティ・スクール」の2つを柱として、「地域とともにある学校」をめざして、日々活動しています。

「小中一貫教育」としての取り組みでは、1、3、5校時の開始時間を小中同じくし、小中学校の教員が相互に乗り入れ授業を行っています。小学校5、6年の7教科で中学校教員が授業を行って複式の解消を図り、家庭科の免許を持つ小学校教員が中学校家庭科の授業を行います。また、運動会などの学校行事をできる限り小中合同で行うとともに、中学校の生徒会活動に小学校5、6年生の児童を組み入れて活動しています。これらの取り組みにより、学力の向上と中1ギャップの解消を図っています。



「コミュニティ・スクール」では、PTA代表や同窓会長、地元の区長や商工会、学識経験者等で組織する学校運営協議会を中心として、「ふるさと田人の活性化」「ふるさと田人を支える人材育成」を目的に活動を展開しています。これまでも、日本一の群生地と言われているクマガイソウの見学や廃校となった校舎を利用して行う「田人ふれあいキャンプ」など、保護者や地域の方々の支援を受けて、地域全体で子どもたちを育てる田人ならではの行事を進めてきました。今年度は、これらの事業を継続・発展させ、さらに体系化して、「田人への思いを深め」「田人の未来を創造し」「周囲と協働して目標に向かって挑戦できる」子どもたちを育成してまいります。

(校長 平山 明裕)

新会員紹介

支会	氏名	校名
福島	石川 幸男	西 信
福島	二平 光明	立子山
伊達	小池 重彰	月 館
安達	助川 徹	白 沢
岩瀬	八木沼 孝夫	稲 田
岩瀬	佐藤 健夫	小塩江
岩瀬	阿部 裕好	湯 本
石川	大竹 孝喜	古 殿
耶麻	高山 良勝	会 北
両沼	佐藤 昭	三 島
南会津	渡部 朋史	荒 海

支会	氏名	校名
南会津	菊池 博基	館 岩
相馬	星 健一	尚 英
相馬	熊澤 正人	原町三
双葉	村上 順一	富岡二
いわき	齋藤 文子	藤 間
いわき	吉田 牧子	大 野
いわき	熊坂 吉徳	川 前
いわき	宗像 達郎	内郷三
いわき	小林 一彦	湯本三
いわき	齋藤 一成	川 部
いわき	平山 明裕	田 人

新会員の声

夢を現実に

本宮市立白沢中学校 助川 徹

遠くに安達太良山を望み、広大な敷地を有し、総合的な施設が隣接する白沢中学校に、平成28年4月1日着任しました。職員玄関で、生徒会役員やPTA役員の方々に心温まる歓迎を受けたことは、今でも忘れられません。

そして今、生徒の笑顔、キラキラした眼差し、努力する姿、情熱をもって指導に当たる教職員の姿に接し、保護者や地域から寄せられる温かい思いや期待を感じながら、毎日の幸せに感謝するとともに、校長としての責任を強く感じているところです。

4月当初、生徒と教職員に「夢を現実に」という言葉を贈りました。「夢を現実に」とは、「常に目標をもつこと。そしてその目標実現のために努力をすること。目標をもつことは、自分から進んで取り組める大きな原動力になる。」というメッセージです。

生徒は、白中精神「やればできる」とともに、小さな目標を立てて、その一つ一つをクリアし、大きな目標達成に向けて、一生懸命に努力をしています。

私も生徒に負けられません。「チームしらさわ」教職員が一丸となって、目の前の生徒一人一人に一番合うやり方は何なのかと、常にオーダーメイドを考えながら、生徒一人一人の夢の実現のために尽力していきたいと思っています。

大きく育て藤中生！！

いわき市立藤間中学校 齋藤 文子

前任校は高等学校でしたので、始業式に藤中学生と会った時は、見た目の小ささに驚きました。高久小学校の運動会で更に小さい小学生に会い、小学1年生から高校3年生までの子どもの成長を実感したところでした。

この約2ヶ月を振り返りますと、修学旅行では、田園風景の中で育った生徒が、はじめは都会の雑踏に戸惑っていたものの、自主研修では困難を解決して目標を達成させました。体育祭では保護者の助けを借りずに生徒会や実行委員が中心になって準備や運営を行い、成功させました。

素直で、明るく、屈託のない生徒たちは、何事にも一生懸命取り組みます。力を合わせて成し遂げようとしています。落ちこぼれそうになる友だちに手を差し伸べる優しさを持っています。私は藤間中の生徒が、主体的、意欲的に毎日を過ごし、自らの力で大きく成長しようと頑張る姿を見続けたいと思います。学校生活で得られた達成感や満足感、自己肯定力に繋がると考えるからです。

そして、本校卒業時には、生徒一人一人が大人になった将来を思い描き、未来に向かって邁進できるスタートラインに立たせたいと思います。

「この子たちを大切に育てなければ」と思い、校長として、生徒や保護者、地域の皆様の期待に応えられる学校づくりをする所存でございます。

二本松市から阿武隈山地に入ったN中が初めての赴任地でした。大学での勉強をおろそかにしていた私は、授業も学級経営も思うような指導ができない毎日でした。

忘れてくても忘れられないその日は、部活動を終え、いつものように最終退庁で火の始末、戸締りを確認し退校しました。しかし下宿でなく大学でアルバイトをしていた旅館に、私事旅行届けを出さずに宿泊していたのです。学校の異変を知ったのは「昨夜N中が火災に遭った」という翌朝のテレビのニュースでした。直ぐに学校にもどりましたが、既に現場検証は終わっていて、改めて私の聴取となりました。昨日はどこに居たか、今までどうしていたか、職員室のたばこの後始末はどうであったか、施錠は確実にしたか等、後で聞くとN中の教職員総出で私を探したが連絡が取れなかったとのことでした。その後、外部の者の不審火であることが警察から発表されましたが、「落第教員が、また、やらかした」私には先輩の目がそのように感じました。

まだ判明しない不審者への対応として学校では午後11時と午前2時の2回、男性教員2名で夜間の巡視を実施しました。私は成りゆき上、毎日の巡視を志願し、土日もない毎日の校長・教頭そして先輩教員との巡視が始まったのです。

前置きが長くなりましたが、私の人生を大きく変えるきっかけになったのはその後の2ヶ月間の先輩の先生との巡視でした。いや巡視の時間までの先生方との時間でした。未熟な私に対して、教師としてのイロハから専門的な指導技術まで各先生が話を聞かせてくれました。熱が入ると巡視後も続く熱い指導でありました。

さて、その指導を受けて、私は変わったのか。変わらなかったような気がします。「あんなに指導したのに全然だめだ」と憤慨されていたかもし

れません。情けない話ですが、当時は「辛かった」という思いが殆どで、有難かったと考えることができたのはN中を離任する時でした。しかし、時間の経過とともに、この体験と指導いただいた事柄が、教員としての私の指針となったのです。

さて、教職最後の年を迎え、多くの方々に教えられてきた事を伝えていくことが最後の仕事と考えています。特にN中やその後の中学校で起こしてきた失敗の数々や教えられた沢山の事柄を先生方に伝えていきます。自分の恥部は隠しておきたいところですが、失敗の数々を伝えることにより親近感をもって聞いてくれているように感じます。校長としてではなく先輩として伝えているところです。「失敗は成功のもと」と言い古された言葉ですが、失敗が大きかったり、多いほどそれを乗り越えたときの喜びも大きいものです。私の場合には現在も失敗の連続で、乗り越えたという感覚はありませんが、38年間教員を続けていることがそれに値するものと、N中の経験を感謝しています。

随想



福島県中学校長会副会長
酒井 完
(会津若松市立第一中学校)

伝えなければ
ならないこと

教えられたことを伝えている2つめは、管理職のやりがい、楽しさを熱く伝えることです。「校長ほど楽しい仕事はない。校長は教職員を変え、学校を変え、地域を変えることさえできる。校長の裁量権は小さくはない。できることは山のようにある」と、あの落第教員が、赤面の至りです。しかし、十分な能力を備えているにもかかわらず、敢えて、苦勞したくないと管理職を敬遠する潮流を変えていかねばならないと考えています。「校長職は困難なことが多いが、一つひとつのことに丁寧に、誠実に対応していけば必ず、道は開ける」と苦しむ私たち校長を励ましていただいた先輩校長への恩返しのために、今日も管理職の楽しさを伝えています。